

記録

阪神大震災

前夜、いつもの生活があった

阪神大震災の前日から記録を始める

——一九九五年一月十六日。「成人の日」の振替休日である。日の出は午前七時五分、平均気温は平年並みの四・二度。休日らしい、いくぶん間のびした時間が過ぎていく。家族だんらんがあり、友人同士が語らい、繁華街はにぎわった。

作家、黒岩重吾（七〇）は六甲山ろくにある兵庫県西宮市苦楽園四番町の自宅で、夕方から飛鳥時代の史料に目を通していた。しばし本を置き、書斎の窓の向こう、眼下に広がる市街地を眺めながら小説の構想を練る。午後十一時を回っていた。

「小説現代」の新年号から始まった連載小説「天風の彩王―藤原不比等」の三回目の原稿執筆に午後から取り掛かっていた。風邪で体調は思わしくなかったが、

読売新聞（大阪）で連載中の「記録 阪神大震災」には、読者から「他紙を圧して読むものを引きつける」「後世に語り継がれるべき記録」など多くの賛辞や感想が寄せられています。

死者五千五百人を超す未曾有の惨事となった震災についての報道・解説は連日行われていますが、この連載では、多岐多様にわたる大地震の側面をヒューマンドキュメントとしてトータルに伝えるのが狙いです。今回、2月20日から3月25日までの連載分をヨミパックに収録、読者にお届けします。また、この連載は7月に単行本として刊行される予定です。（なお、記事中の敬称は省略してあります）

締め切りが迫っている。厚手のセーターを着て、風邪薬を服用、原稿用紙四枚で万年筆が止まっていた。

「ビデオでも見ようか」。階下に入り、居間のソファに。妻の秀子（六〇）は自宅にいる。レミー・マルタンのグラスを傾けながら、米国映画「氷の微笑」を楽しんでいる。見終わった時にはグラス三杯をあけていた。顔がほんのり赤らみ、実に心地いい。二階に上がり、別の寝室にいる秀子に「おやすみ」と声をかけて、ベッドに潜り込んだ。

六日ぶりに東京から戻ったタレントの間寛平（四〇）。正午から武庫川河川敷で朝日放送の深夜バラエティー番組「ナイトINナイト」の収録に臨んだ後、トレーニンクウェアのまま兵庫県宝塚市売布一

の自宅へ。出迎えた妻の光代（三〇）に荷物と渡すと、自宅を飛び出し、十キロ走り込んだ。三月二十六日にロサンゼルスで開かれる「デイズニールランド・マラソン」に向けての練習だった。

家に戻ると、高校一年の美代（二〇）と中学二年の慎太郎（二二）が待っていた。「ごちそうでも食べようか。久しぶりやし」。近くの料理店に抜け、てっちりを注文した。寛平はビールをぐいぐい飲み、ほろよい気分。慎太郎に「どや、ギター、うまなったか。おれに歌、作ってくれよ」

衆議院議員の岡崎安美（四三）は知人の葬式に出た後、次の神戸市議選に出馬予定の後輩に「しっかり歩きなさい」と、靴をプレゼント。午後六時三十分、J R

元町駅前にある護憲社会党事務所で、翌日に予定されていた山花貞夫・前社会党委員長らの会派離脱問題についてテレビインタビューを受けた。山花さんは社会党をつぶす張本人です。語気強く述べた興奮が残ったまま、神戸市・ポートアイランドにあるマンション十二階の自宅へ。

高校二年の長女章子（一七）と中学三年の二女彩子（一五）が、夕食の準備をしてくれていた。彩子は学年末試験が終わった後の連休とあって、テレビを見ながらのんびり。「試験はどうだったの」「まあまあよ。台所のテーブルにあったカボチャの煮付けを一口つまむ。まずまずの味。翌日の娘の弁当にと、ラップに包んで取り分けた。

神戸韓国学園教師の全玖楽（チョンミンラク）（四三）は神戸市長田区神楽町、同学園四階の自室で、雑誌社から依頼された「子供と遊び文化」の原稿を書きながら落ち着かなかった。夕食の後、妻金